

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

No.51

ニューズレター

INSTITUTE FOR THE STUDY OF CHRISTIANITY AND CULTURE, Kanto Gakuin University

巻頭言

所長 石渡 浩司
Hiroshi Ishiwata

昨2021年度におけるキリスト教と文化研究所の活動は、今春発行された所報『キリスト教と文化』第20号でお伝えした通りです。そこには、研究プロジェクト、研究グループ、及び委員会の活動が記されています。本研究所は従来、それらの活動の他に、社会連携センターの公開講座への参加、講演会、あるいは公開シンポジウム等を行ってきました。しかしそれらは、新型コロナウイルスの影響もあり、昨年度までの2年間まったく行うことができませんでした。この状況において、それらを再開することを考えた場合、まずは講演会であろうと考え、4月に行われた所員会議での承認を経て、今年度実施の運びとなりました。



講演会は、最近では、コロナ前の2019年に実施しましたが、その際は、既に開催を決めていた大学宗教教育センター主催のキリスト教講演会に、言わば相乗りさせていただき、共催というかたちでの実施となりました。今回も、大学宗教教育センターのご理解とご協力を得て、同センターとキリスト教と文化研究所共催というかたちで、キリスト教講演会を実施することができました(今回は、センターの方が主催ということではなく)。外部講師は、「英連邦戦没捕虜追悼礼拝」実行委員会代表をされている奥津隆雄先生です(飯能ホライズンチャペル牧師)。演題は、「平和と和解への道のりを歩む—『英連邦戦没捕虜追悼礼拝』からのメッセージ」です。講師の選定については、前回同様、当研究所所員で、「キリスト教と平和研究グループ」の代表をされている豊川慎先生(大学宗教主事・理工学部准教授)にお世話になりました。前回はコロナ前でしたので、対面形式で講演会を行いました。今回は、8月下旬に大学礼拝堂で講演を収録し、その動画を10月3日(月)9時より大学HPの`メディアライブラリー`内、`Movie`の中のYouTubeで配信しております。

講演の中でも言及がありますが、2022年は、ロシアによるウクライナ侵攻という衝撃的な事件が起こった(起こっている)年です。また、沖縄本土復帰50周年の年でもあり、戦争と平和、そして和解について深く考える時であると思います。奥津先生は、大学生の時に戦争の爪痕の残るフィリピンを訪れた体験学習にも言及しつつ、横浜市保土ヶ谷区にある英連邦戦死者墓地における追悼礼拝の趣旨や目的、またそれに関連することをお話くださり、戦争の悲惨さ、そして平和と和解の大切さを改めて教えてください。皆様におかれては、是非とも奥津先生の講演をご視聴いただけましたら幸いです。なお、豊川先生も関わっておられる「英連邦戦没捕虜追悼礼拝」については、HPがございますので、そちらも合せてご覧いただければと思います。今回の講演によって、平和への思いがいっそう強められ、私たちの心と行動が少しでも神の御心に沿うものと変えられますように願っています。

研究所の今後の活動については、コロナの状況を見つつ、従来行っていたものを適宜再開できればと願っています。また、今年度新設されたキリスト教人間学インスティテュートと関わらせる仕方で、研究所の研究成果を、学生や社会に向けて発信していくやり方もあるのではないかと考えています。引き続き本研究所を覚えてお祈りいただきましたら幸いです。

英連邦戦没捕虜追悼礼拝について

豊川 慎
Shin Toyokawa



2022年度の関東学院大学キリスト教講演会（宗教教育センターとキリスト教と文化研究所の共催）は今年度もコロナ禍の状況ゆえに事前収録及びYouTube配信という形で実施された。英連邦戦没捕虜追悼礼拝の実行委員会代表の奥津隆雄氏を講師としてお招きし、「平和と和解への道りを歩む-英連邦戦没捕虜追悼礼拝」と題する講演がなされた。講演の内容については奥津氏自身が宗教教育センター発行の『告知板』11月号において講演概要をまとめてくださっているのので、そちらも併せてご覧いただきたい。

毎年8月第一土曜日午前11時から追悼礼拝が行われている保土ヶ谷の英連邦戦死者墓地には、泰緬鉄道での強制労働の後、日本に移送され、日本の軍需工場や炭鉱でも重労働に従事させられ、祖国に帰れずこの異国の地日本で生命を奪われた捕虜たちが埋葬されている。泰緬鉄道とは、日本軍が第二次世界大戦時にインド侵攻のためにタイ（泰）とビルマ（緬間、現在のミャンマー）の間に敷設した悪名高い軍事鉄道である。タイのノンプラドックからビルマのタンビザヤまで総距離415キロに及ぶ鉄道であり、1942年に着工、翌年10月に完成している。この敷設工事には多くの連合軍捕虜と現地の労務者が動員され、劣悪な状況下での過酷な強制重労働ゆえに多くの命が奪われたことで知られている。連合軍捕虜の犠牲者の数は1万3千人、また現地労務者の犠牲者数は10万人とも15万人とも言われている。それゆえ、泰緬鉄道は「死の鉄道」（the death railway）とも呼ばれ、日本軍の残虐性を示す象徴ともなっている。

太平洋戦争時、タイ国駐屯軍カンチャナブリー分隊に陸軍通訳として配属され、敗戦直後は連合軍の通訳を務めた永瀬隆氏が斎藤和明氏（国際基督教大学名誉教授）と雨宮剛氏（青山学院大学名誉教授）と共に1995年8月5日、戦後50年を機に始められたのが、英連邦戦没捕虜追悼礼拝である。追悼礼拝の三人の呼びかけ人のうち、斎藤和明氏が2008年に、永瀬隆氏が2011年に亡くなられ、現在では追悼礼拝実行委員会（奥津隆雄氏代表）を中心に、毎年8月の第一土曜日に11時から追悼礼拝が行われている。

追悼礼拝の呼びかけ人の一人であった斎藤和明先生が天に召される数週間前に起草した趣旨文には、追悼礼拝の土台となる8つの意義が記されている。①憎しみの消えない犠牲者と日本人との和解のきっかけが与えられるため、②世界の恒久平和の実現を目指すため、③怨恨と憎悪を克服し、過去の事実を直視し、日本の戦争責任を認識するため、④戦争責任の罪を見据え、被害者に対して謝罪をするため、⑤戦争犠牲者たちの声を聞き、いかなる戦争に対しても反対の意を表するため、⑥先の戦争で犠牲となった方々を追悼するため、⑦戦争の記憶を継承し、戦争のない平和な社会を次世代に引き継ぐため、⑧平和を作り出すためである。つまり、追悼礼拝において、「謝罪」、「和解」、「追悼」、「不戦」、そして「平和の継承」がその柱となっている。

戦後50年となる1995年に、永瀬氏の呼びかけにより始められることとなった追悼礼拝であるが、永瀬氏自身はキリスト者ではなく、仏教徒であった。しかし、永瀬氏は青山学院大学在学時に青山学院で人間の罪について学んだという。キリスト教が説く罪、人間の罪深さを永瀬氏は自身も加害の一翼を担った日本の捕虜虐待の中に見、和解の働きを続けてこられた。

歴史認識に起因する近隣諸国との外交的軋轢が近年ますます深刻化している状況にあって、報復的な思考や姿勢ではなく、和解による信頼関係の回復が喫緊の課題となっている今日、英連邦戦没捕虜追悼礼拝は日本の戦争罪責を想起する時であるとともに、キリスト者として和解の福音を真摯に受け止め、熟考することをわれわれ一人一人に促す時でもある。若くして命を落とした連合軍捕虜1800名あまりの個々の墓碑に刻まれた言葉を読んでいくと、二度と同じ過ちを繰り返してはならないという決意に促される。

ヴァイツゼッカー大統領がドイツの戦後40年を機に語った「1985年5月3日」演説の中の有名な一節「過去に目を閉ざす者は結局のところ現在にも盲目となります」とあるように、われわれは過去から学び、過去を想起し、今ここに生きる者として和解の務めを為すことが求められていよう。毎年の追悼礼拝には近隣の中高生たちも参加し、戦争と平和について考える「フィールドスタディー」の場になっていることも特記しておきたい。追悼礼拝の実行委員の一人として、私もまた横浜・保土ヶ谷から平和と和解のメッセージを今後も発信し続けたいと思っている。大学HPから講演会のYouTube映像をぜひご覧いただきたい。

客員研究員紹介



スムットニー 祐美

Yuumi Smutny

関東学院大学非常勤講師のスムットニー祐美でございます。専門分野は茶道学と異文化コミュニケーションで、具体的には中世における茶の湯とキリスト教との文化交流に関して研究して参りました。研究活動としては本研究所、学会への投稿、拙著上梓、茶道雑誌への連載、講演などを行っています。

このたびの千利休をテーマとするNHK「歴史探偵」への出演に際して、私の担当はヨーロッパ人宣教師の視点から捉えた利休の茶の湯でした。番組では渡邊佐和子アナウンサーの「千利休の茶の湯なのにチャペルですか」というセリフに始まり「やって来たのは関東学院大学、ミッション系の大学です」と本校が紹介され、続いてチャペルに掲げられた輝かしい十字架が放映されました。感謝！撮影は図書館の書庫で約2時間ほど行われ、過去にローマイエズス会文書館より収集した茶の湯関連史料を机に並べて解説いたしました。

豊川慎先生には多大なご支援を賜りました。星野洋平氏はNHKとの調整を、図書館の堀池奈津子氏は撮影場所をご提供下さいました。この場をお借りして深く御礼申し上げます。今後も外国人宣教師の日本宣教について探究して参ります。引き続きご指導のほどよろしくお願いいたします。



11月27日よりアドヴェント、28日から学内各所のクリスマス・ツリーに明かりが灯っています。

関東学院大学 キリスト教と文化研究所

〒236-8501横浜市金沢区六浦東1-50-1
TEL：045-786-7873（研究所直通・月～金9：30～17：00）
FAX：045-786-7806（研究所直通・24時間受付）

発行者：石渡 浩司
Director：Hiroshi Ishiwata